

[論文]

ドレッサーデザインの展望Ⅱ —姿見型ドレッサーの提案（複合タイプ）—

ANALYSIS OF DRESSER DESIGN II
Suggestion of a large mirror dresser (A compound type)

岩松 里紗^{*1} 伊藤 真市^{*2}

Lisa IWAMATSU and Shinichi ITO

*1 宮城大学事業構想学研究科

*2 宮城大学事業構想学部デザイン情報学科

Abstract

The last time, I paid my attention to "make up" of a modern woman and investigated the business chance in "Dresser". On that occasion I discovered new makeup-style of "make up with standing", and it became clear that there was big possibility in "Large mirror dresser". I stand on the point that I extracted for previous consideration and I show concrete plan, a design model and suggest a new style of a large mirror type dresser. I think about a dresser from two sides of a design with a functional aspect and a design to appeal for psychologically. In addition, and I consider a target and situation suggestion to do and a sale strategy.

キーワード：姿見, ライティングデスク, 用と美, デコレーション

Key words : *Large mirror, A writing desk, Use and the beauty, The decorations*

1 はじめに

統計によれば、2005年女性の就業者割合は45.4%だという。(総務省：労働力調査年報より)

実に女性の半数近くが社会進出を果たしている。家事に従事することが女性の役割、とされた社会的ステレオタイプは、もはや過去のものとなった。

女性の生活スタイルに変化が生じている。すなわち、働く現代女性へ向けた新たな生活の提案が期待される。しかし、女性に関わる商品は、未だステレオタイプ化した女性の為の提案に留まっているように感じる。

既存の商品デザインを見直し、現代女性へ向けた新たな価値を創出できないだろうか。そこで取り上げたのが、いつの時代にも女性と関わり深い“化粧”である。化粧空間となる“鏡台・ドレッサー”を切り口に新たな化粧スタイルの提案を考えた。

“鏡台・ドレッサー”の成り立ちから歴史的変遷、現状調査、実態調査等を行い、化粧スタイルの可能性を探った。そして、これらの結果をまとめ、分析し、いくつかの可能性を提示した。その結果、今後の化粧空間として「姿見型ドレッサー」に可能性があること

が明らかになった。

(2005年宮城大学紀要「ドレッサーデザインの展望」参照)

本考察は、現代女性の新しいスタイルといえる「立ち化粧」に焦点を当てる。「姿見型ドレッサー」を用い、現代女性へ向けた新たな化粧環境を提案することを目的とする。

2 複合タイプドレッサー

(1) 姿見

現在の化粧行為において、“立ち化粧”スタイルが存在している。また、全身のトータルコーディネート性を重んじて化粧を調整する傾向も見られた。つまり、全身チェック可能な「姿見」が化粧鏡として適しており、需要が見込める。実際、家具店へのヒアリングから、「姿見」が鏡関係で一番売れているという結果が得られている。このことから、「姿見型ドレッサー」に可能性を感じる。

「姿見型ドレッサー」の既存商品で、満足できるものは数少ない。販売されているものの大半は、姿見の横にコンパクトな収納とスツールという形態のものにすぎない。

もっと機能を向上させ、さらに現代女性が価値を見出せるものが求められる。そこで、化粧台機能に別の機能を組み合わせ、新しいスタイル創出を狙う。

(2) ライティングデスク

化粧は、個人のプライベートな領域に属するものである。だが、特に結婚後の現代女性において、プライベート空間を持たない女性も存在する。実際、次のようなケースが挙げられる。

日本の子供は、小学校入学時に学習机を買ってもらった慣習がある。その後、学習机空間が一種のプライベート空間として機能していく。しかし、現代女性は結婚時に机を実家に置いて新居に移る、というケースがほとんどだという。こうして新生活を始めた途端、自

分だけの空間が無くなるという事態が起こりうるのだ。

ここで注目したいのがライティングデスクである。学習机以来の第二の机として、現代女性たちにプライベート空間を作り出す可能性を持つからだ。また、一人暮らしの際にもライティングデスクは必要性が高い。

(3) 複合のメリット

このようなニーズを踏まえ、「姿見型ドレッサー」に「ライティングデスク」機能を付加することとした。

立って化粧ができて、座るとデスクとしても使える。このように、行為によって用途が変化すればおもしろい。

さらに、「姿見」と「ライティングデスク」の二つの機能を組み合わせたドレッサーは未だかつて存在しない。省スペースが望まれる現在、単独の家具でこれらの機能がまかなえれば、更にニーズも高まるだろう。よってこの提案に挑戦することとした。

3 ドレッサーの“用と美”

古代ローマの建築家ウィトルウィウスは、著書「建築十書」の中で「用・強・美」の概念を提唱している。構造物は、機能性（用）、強度（強）、美しさ（美）を兼ね備えるべきというものである。

この概念は、建築物をはじめ、さまざまなモノをデザインする上で、常に考えなければいけないことである。もちろん、今回のドレッサーにもこの概念は適用される。

これらに習い、具体的なデザインの前段階としてドレッサーに求められる機能や使い勝手（用）と魅力的な形態（美）について考察した。（強）に関しては、構造によるところが大きいので、今回は割愛する。

3.1 機能（用）

(1) 化粧機能

ドレッサーの主機能は、化粧行為の支援である。よ

り快適に、使い勝手良く化粧が行えること。この点を押さえることはドレッサーの必須項目だ。その為に必要な機能を以下に示す。

① 鏡（顔や姿を映し出す）

ドレッサーは化粧の為に取り付けられた「鏡」が中心となった家具である。化粧の際には、鏡との距離が非常に重要となる。化粧の段階ごとに、顔を近づけたり、遠ざけたりといった行為が想定される為である。

現在、鏡の前面に化粧台を配置したドレッサーが一般的だ。台の奥行きは全体の収納力と関わってくる為、つつい大きく取られる傾向にあるようだ。化粧行為を優先させ、台の奥行きを適宜調整するべきだろう。

また、鏡自体に関しては、顔の見栄え、つまり映り方が非常に重要なポイントとなる。化粧は自分を魅力的に変身させる行為である。ただ、顔が鏡に映れば良いというものではない。自分の姿がいかに美しく見えるか、という事柄が優先される。

鏡に映る顔の割合と、それ以外の余白の割合がこの関係を左右する。余白が少なすぎると窮屈な印象となり、逆に多すぎると、自分以外の背景部分が主役になってしまう。あくまで、自分が主体となるよう、適度な余白の関係をつくりたい。

② 化粧品収納（化粧用道具を収納する）

今日の化粧品は、種類、形態共にかなりのバリエーションを持つ。収納に関しては、このような化粧品の様々な形態・量をすっきりしまえる収納力が求められる。また、化粧品を使う際の取り出し易さの配慮も必要だ。一時的に置いておく台の配慮も必要となる。

③ 照明（顔を光で照らし出す）

化粧をする上で、顔を照らす光源は化粧の出来を左右する要因となる。適度な明るさが必要であることをはじめ、光色にも注意が必要だ。ここを押さえないければ、予想以上に厚塗りしてしまう事態も起こりうる。

一番良い光源は、自然光である。自然光の元で化粧できれば良いのだが、実際そうもいかない。天候や時間帯、部屋の間取りによって制限されるからである。部屋の照明光を利用する方法もあるが、うまく光がとれるとは限らない。化粧に必要な十分な明かりの設計は必須である。

④ 小道具収納（ティッシュなどを収納する）

化粧時に使用する頻度が高いものとして、ティッシュがある。ちょっとしたメイクの修正や、化粧用品の清掃などにも利用する。

化粧時には近くにティッシュが用意してあると非常に便利である。つまり、化粧収納と共に、ティッシュなどの小道具用収納がついていることが望ましい。

⑤ くず入れ（ごみを捨てる）

先述したが、ティッシュを使うということは、それを捨てるくず入れが必要になる。ドレッサーのそばにくず入れが置けるスペースが確保できれば良い。だが、さらなる利便性を考え、ドレッサーに組み込む工夫を施すこととした。

⑥ コンセント（化粧用電化製品を使用する）

ドレッサーでは、化粧以外に髪の設定なども行う可能性がある。その際、使用が想定されるのがドライヤーやカーラーなどの電化製品である。

化粧と共に髪を設定するという需要は高いはずだ。このような事態に対応できるよう、コンセントが設けであると良い。例えば、携帯の充電など、他の用途でコンセントを使う可能性もある。コンセントの付加は利便性を高める。

以上が、大まかな機能、そして満たすべき項目と考える。各機能同士が連携し、より効果を発揮するように配置したい。これらの諸機能が充実することにより、快適な化粧空間実現へ近づかずは。

このように、ドレッサーという化粧空間で行われる行為を細かく想定し、可能な限り対応していく。そういった小さな心遣いが、女性にとって購入時の意思決定の重要なポイントとなる。

(2) 既存ドレッサーの機能と問題

では、実際のドレッサーの機能実態はどうなっているのだろうか、現状を検証してみる。

現在販売されている一般的なドレッサーを俯瞰してみると、前述の点が十分に機能していないものが実に多いことに気がつく。

例えば、一番普及しているタイプを考える。半身鏡に花形ランプ、引き出し収納、スツールがセットになった一般的な洋風ドレッサーである。このタイプは、洋風化の進んだ昭和期に婚礼家具として普及してきた。

(図-1)

ロングセラーだけあって、鏡と台の兼ね合い、収納力、ランプの形態に細かな工夫が見られる。しかし、化粧時の配慮が低いようだ。

例えば、正面の引き出しを引き出しておく化粧時に邪魔になってしまう。また、照明も装飾目的性が強く、薄暗くやや黄色みがかかった白熱光。暗がりでは化粧できないばかりか、かえって光色が邪魔になり、自然な状態の色が見えなくなる。

もう一例、コンパクト型ドレッサーを見てみよう。このタイプは、若者をターゲットとしたインテリアショップでよく取り扱われているものだ。鏡が開閉式でコンパクトに収納でき、ちょっとしたデスクになるというドレッサーである。(図-2)

一見便利そうだが、そうともいえない。省スペース性を重視したせいか収納力は落ちている。さらに、開閉した際には必ず鏡の前面に収納部分が配置される。その為、どうしても鏡と顔の距離が離れてしまい扱いにくいのだ。

実際、台上にモノを乗せると、すぐにドレッサーとして機能しない構造になっており、大変使い勝手が悪

い。

このように使用の立場から精緻に検証してみると、実際に売れているドレッサーであっても、実は見掛け倒しのドレッサーがたくさん存在しているのだ。すなわち、機能面から見ても、ドレッサーの見直しを図る必然性が感じられる。

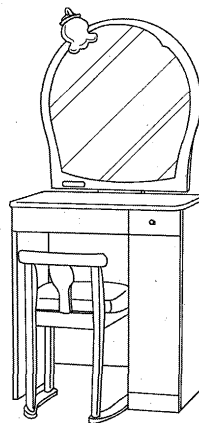


図-1 一般的洋風型

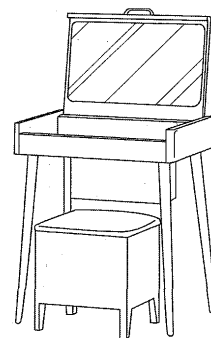


図-2 コンパクト型

(3) モノとスケール

生活に関わるモノは、実際に人間が使用して始めて意味を成す。総じて、“使いやすさ”が備わっていなければ良いデザインとは言えない。使い勝手に不具合が生じるようなデザインは、やがて使用することすら億劫になる。

“使いやすさ”を実現するには、機能性を考慮することはもちろん、身体的なスケールに合わせた設計が必要となる。その為、まずはきちんと基本的な基準寸法を押さえておきたい。

(4) 身体的尺度としての人間工学

今回、ドレッサーという“家具”を用いて生活環境を創造する。まずは“家具”として、最も基本的な寸法項目をチェックしていく。

学問的に、人間工学の分野では、人間の身体寸法からモノの寸法を規定する研究が行われてきた。これにより、人間にとって快適に使用できるモノの基準寸法が把握できる。

これらの成果は、人間の行為別に検証され、椅子をはじめとして様々なモノの中に取り入れられている。そこで、人間工学によるデータから基準寸法を抽出することとした。

(5) 座り姿勢

日本人の“座る”という行為に関しては、千葉大学の小原二郎教授チームによる研究がよくまとめられている。

人間の骨の構造から、椅子の座、背もたれ、脚、肘掛当の関係が規定される。作業用椅子から安楽椅子までいくつかのプロトタイプが定められている。

この研究結果から、作業用椅子のデータを参考に、ライティングデスク使用時に必要な最大・最小寸法、推奨値を押さえた。(図-3)

今回は、身長約 155cm~160cm、体重 49kg~54kg の女性を想定したデータを用いた。

基準寸法

	MAX	MIN	推奨値
座位基準点	—	210 (休息用)	390
差尺 標準女性 座高967で検討	・筆記作業の能率に重点を置いた場合 1/3座高-(2~3)cm		286
	・長時間使用に重点を置いた場合 1/3座高		289
支持中心	—	—	235
背もたれ角度	90°	0°	100°
背もたれ 支持点 (座位基準点から)	上端	500	310
	下端	250	190
作業域	500	200	400

図-3 基準寸法 (小原教授のデータを元に表にしたもの)

人間の身体構造から、家具の各寸法の最大値、最小値、推奨値を計測する方法だ。これは家具寸法を設定する方法として奨励できる。この研究を参考に、身体の側からアプローチする手法で寸法を定めていきたい。

例えば、先ほど指摘した鏡との距離関係や、台の奥行き等、従来型のドレッサー寸法を見直す方法として利用できるだろう。

(6) 立ち姿勢

前述したとおり、化粧=“立つ”、デスク=“座る”という2つの行為を想定している。ここでは現代女性の新しいスタイルである“立ち化粧”について検証していく。

一番のメイン行為である立ち化粧は、鏡との関係がポイントとなることが考えられる。今回の場合、姿見という大きな鏡を使用することもあり、接近時の見え方の他に、全身の見え方にも配慮が必要である。

姿見に関しての基準は定められておらず、自身で調査する必要があった。その為、前述の方法を参考として検証実験を行い、姿見寸法を定めた。

この検証では、日本人女性の平均身長約 155cm~160cm、眼高 143cm~149cm、の女性を想定し、視野角は水平から上に 25°、下に 35° とした。

検証方法は、既存の姿見を使用し、一定地点から鏡の見え方を探るものである。姿見の一部を隠すことによって、見え方を検証し、縦寸法と横寸法の最小値を選出した。

姿見の全長を A、床面から下端の高さを B、横幅を C として測定する。(図-4)

① 縦寸法

まず、縦寸法 A、B。これは、鏡から 500mm 離れた地点を足場に、鏡幅 C を 460mm で固定して測定した。姿見としての機能性を考え、全身をカバーできる寸法を見ていく。数回の実験の結果、全身をカバー可能な姿見の最小寸法は、A+B 1610mm (A 1200mm、B 410mm) ということが分かった。(図-5)

② 横寸法

次に、横寸法 C。鏡から 150mm 離れた地点で、縦寸法の最小値 A+B 1610mm を使用し、検証した。接近時の顔の見え方と体の映り方を見ていく。結果、化粧鏡として機能し、顔がきちんと映る幅の最小寸法は C250mm 以上ということが分かった。(図-6)

③ 検証結果から

この2つの実験結果から、化粧時に快適に使用可能な姿見の推奨寸法を定める。推奨値化する際、これまで選出した最小値と、各寸法の最大値の平均を求めた。縦寸法の最大値は、1770mm とする。これは、鏡から500mm 離れた地点からみた際に、視野角に入る鏡の上限に余裕 (5cm) を持たせた値である。

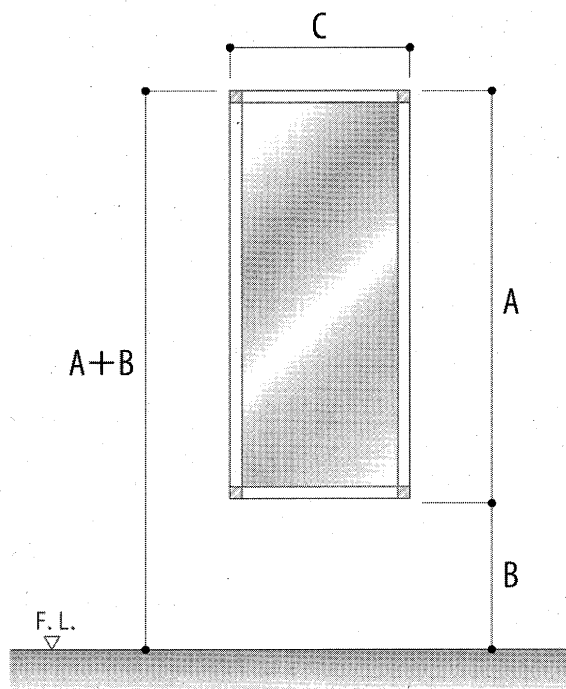


図-4 検証の鏡基準

姿見の最小寸法 (タテ)

A	B	A+B	メモ
1200	410	1610	全身をカバー◎
1140	600	1610	膝から上をカバー○
1000	610	1610	膝から上をカバー○
800	810	1610	太ももから上をカバー△
600	1010	1610	へそから上をカバー△△半身

※幅460、鏡との距離500(全身を見渡す感じ) で実験

図-5 縦寸法の検証

姿見の最小寸法 (ヨコ)

C	メモ
50	化粧できなくもないが、範囲狭い△△△
100	顔全体はなんとか見えるが、化粧しづらい△△
150	上記と同様
200	顔全体がすっぽり見え、ぎりぎり化粧鏡として使用可能△
250	体の横幅がなんとか見える○
300	化粧鏡として機能○
460	普通の姿見の寸法

※高さ1610、鏡との距離150 (化粧時の接近距離) で実験

図-6 横寸法の検証

横寸法の最大値は、460mm とする。これは、一般的姿見の幅であり、コンパクト性を考えてこの数値以下が望ましいと考えたからである。

この寸法によって平均値を割り出すと以下のような推奨寸法が定まった。

A+B 1690mm (A 1290mm、B 400mm) C 355mm 以上

④ 身長への対応

今回定めた基準寸法は、基準の一例に過ぎない。なぜなら、元々基準とした女性の身長が、平均身長であるためだ。平均より身長の高い女性もたくさんいる。

このことを考慮し、身長という点でも8割~9割の女性が満足できる寸法を検証していく必要がある。

今回の基準とした身長以上の人への対応策として、設置する鏡をわずかに上向きに角度をつける方法がある。そうすることで、映し出す範囲を上方向に拡張することができる。

これらの点に関しては、身長データなどを収集し、さらなる検証を続けていく。

3.2 魅力 (美)

(1) モノの魅力

これまで、機能的な側面について考察してきた。ここからは、もうひとつの重要な側面 (美) について考えていく。(美) とは、モノの形態、色彩、素材等の総合作用によってもたらされる感覚的なものだ。つまり、

人の心理に訴えかけるモノの魅力と言えらるう。

(2) 女性と商品

現在販売されている数多の商品を見ていると、明らかに女性をターゲットにした商品が数多くあることに気付く。それらの商品には何かしら共通したデザイン言語があるように思われる。ジェンダー化されたデザインが存在しているのだ。

女性の場合、どうも見た目の印象が購入の決め手となる傾向がある。彼女たちは、感覚的にモノを選択している。

ドレッサーには、印象で購入するという傾向が顕著に現れるようだ。先に既存ドレッサーの問題点を指摘したが、機能の不便が明白であるドレッサーが購入される、という現状がある。なぜだろうか。それは、心惹かれるデザインであれば、多少の不具合は見逃しても良いとする心理が働いているから、と考えられる。機能以上にデザインから受けるイメージの比重が購買意欲を左右している。

つまり、ドレッサーの場合、彼女達の心理に訴えるデザイン戦略をとることが強く求められる。その為には、女性に好まれるスタイリングを実現することが鍵となる。

(3) 女性文化とモダンデザイン

「女性趣味」というと、ピンク色、フリフリのレース、花柄、派手に装飾された家具や食器などが思い浮かぶ。明らかに女性と関連付けられるこれらの趣味は、今も生活の随所に発見することができる。

可愛らしいものを身の回りに置きたい。何かを飾り付けたい。自分だけのオリジナルを作りたい。このような欲求が、女性の行動や趣味にあらわれる。

しかし、これら「女性文化」は近代デザインにおいて、しばしば低俗と見なされてきた。合理的価値観を重視するモダンデザインの風潮により、これらは文化的な事象の周縁へと追い出され、事実悪趣味のレッテ

ルまで貼られている。

近代化による大量生産文化により、効率性が重視された結果、装飾的要素はどんどん排除されていく。ここでは、機能を尊重したモダンスタイルに落とし込むことが良いとされ、その考え方は今日にも引き継がれているようだ。

モダンデザインによるデザインの功績は大きい。だが、果たして機能的で装飾を剥ぎ取ったシンプルな形態が本当に魅力的なのだろうか。装飾行為などに見られる、女性的な趣味に潜むデザインの魅力というものが明らかに存在すると思われる。

(4) スタイリング方法

機能は当然満たされて然るべきものである。そうでなければ、時と共に無用なものとして使われなくなる。実際、ドレッサーとして機能せず、物入れと化したドレッサーが多く存在している。

今回は機能的デザインのみで完結せず、さらにデコレーションを施すことで一種のスタイルを付加することとした。

機能の他に、飾りつけ要素を加えるこの考え方は、近代におけるモダンデザインの思想に相反する性質を孕んでいる。しかし、機能の重視よりも見た目重視、という逆転の状況がドレッサー市場で起こっていることは事実である。

よって、あえて女性に提案するスタイルのひとつとして、デコレーションによるデザインを進めた。

(5) 女性と好み

一般に、可愛らしい、きれい、上品などといった要素が女性に好まれている。女性の好みを自分の中で捉えるため、女性が好みそうな形態やイメージを使用したコラージュを作成した。(図-7)

そこから、抽出できたのは、やわらかな曲線、ストーリー性、花柄などのモチーフ使いなどだ。これらを満たす要素を用い、女性の好みにアプローチしていく。

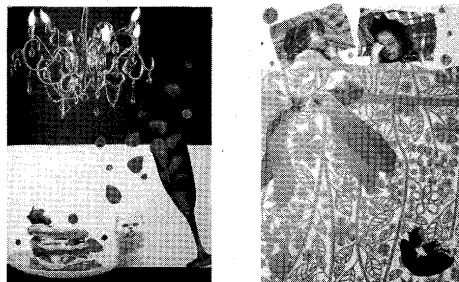


図-7 女性好みのイメージカラー例

(5) デコレーションイメージ

ここでは、先述の要素を満たす、デコレーションイメージについて考察する。

歴史的に、各時代でさまざまなスタイル、様式が存在している。今回は、その中でも女性が好ましく思うテイストとして代表的な、ロココ調スタイルを取り上げる。(図-8)

ロココ調のやわらかい曲線的魅力や、華麗で豪華、エレガントな貴族風の形態が女性を惹きつける要素だと考えた。実際、化粧品にはロココ調の要素が取り入れられたものがよく見られる。

しかし、ロココのテイストというものは、空間全体の調和と共に成立しているものである。例えば、ロココ調の椅子を考えてみてほしい。これがロココ調装飾を施した空間に置かれると、まわりの装飾と馴染んで調和する。しかし、現代の生活空間にこの椅子が置かれたらどうだろうか。予測するに、椅子の存在感が大きすぎて、くどくどした印象になってしまうのではないだろうか。

つまり、ロココ調をそのまま再現するだけでは、現代の生活空間に違和感を与えかねない。よって、現代的にデザインを見直す操作を加える。

この為、ロココ調の形態的魅力や装飾イメージを抽象化するという手法をとる。この抽象化の度合いを調節することで、新しいフェミニンスタイルをアレンジする。あくまで様式ではなく、飾りとして形態を取り入れるということである。

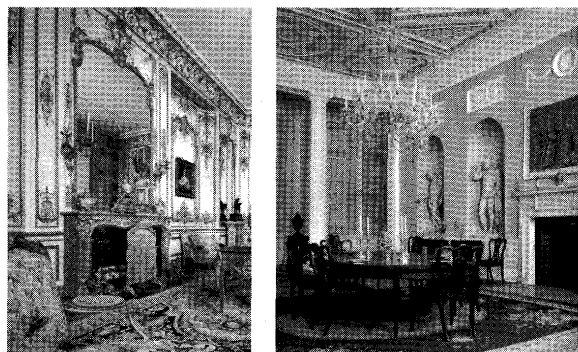


図-8 テイストモデル

(6) デコレーションと自由性

デコレーションという装飾要素でデザインにイメージを付加する戦略は、女性に対し有効と考える。なぜなら、デコレーションを付加することは、言い換えれば、テイストを自由に变化できる自由性を備える為だ。

女性の好みといっても多種多様な要望がそこには存在し、人それぞれ好みのテイストは異なる。また、女性たちの間には流行があることを考慮しなければいけない。彼女たちの趣味は日々更新される性質があり、トレンドなどがその傾向を表わしている。

だが、装飾の負の点として、見慣れてしまうと飽きるといった点も考えられる。デコレーションを簡単につけ変えできる仕組みを作っておけば、この飽きを解消し、個人の気になったスタイルをアレンジできる。

すなわち、女性たちの多彩なニーズに対応する上で可能性の高いアプローチと言える。

(7) デザインモデルと展開

今回のデザインは、ロココ調を元としたフェミニンスタイルで形成していく。では今後、それ以外のテイスト抽出はどのように行えばいいだろうか。

方法としては、今回のように歴史的なものの中から形態を抽出する手法がある。もう一方で、実際のモノのデザインからテイストを抽出し、形態づける手法も考えられる。

例えば腕時計など。種類が豊富にあり、かつジェンダー的なデザインがあるモノに焦点を当て、マッピング

グ、分析を行う。そこからデザインテイストを持ち出してアレンジする。

このように、次のスタイルの展開を考えると、歴史的様式の把握や、既存商品の調査が必要となる。今後、これらを把握し、バリエーションを展開させたい。

4 企画案

(1) デザインコンセプト

今回のコンセプトは、現代女性の“立ち化粧”スタイルを実現し、魅力的な化粧空間を作り出すことだ。姿見型ドレッサー＝立ち化粧、ライティングデスク＝作業という二つの機能を持つ、まったく新しいタイプのドレッサーを考案する。これらのドレッサー機能をまとめると(図-9)となる。

(2) ドレッサーの構成

各機能はドレッサー外部と内部で分割した。外部前面に姿見を配置し、その横に収納をつける。内部にライティングデスクを設け、姿見の開閉でデスク空間があらわれる仕組みだ。

姿見が開閉して内部に少量の収納という形態や、半身鏡を開閉してデスクとするドレッサーはすでに存在している。しかし、姿見の内部にデスクを持つものは未だ存在しない。新しいスタイル創出の可能性がある。

(3) 全体のスケール

姿見自体が大きい為、どうしても全体のスケールが大きくなりがちである。モノを排除し、空間を広く取ることに意識が向いている現在、省スペース性は考慮しなければいけない。

また、身だしなみを整える家具に、洋服ダンスが挙げられる。今後、ドレッサーと洋服ダンスを同空間で使用する展開も考えたい。よって、全体のスケールは洋服ダンス一つ分と同程度のスケールという基準を設けた。(H1900 x W900 x D600 以内)

(4) 化粧空間

前面の姿見部分には、女性を魅力的に変身させるよう、空間自体に化粧行為を演出する要素を持たせたい。よって、姿見周りに装飾を配置し、その雰囲気を高め、一種のディスプレイ的要素とする。この鏡部分を基調として、全体をデザインした。(図-10)

また、これまで検証してきた化粧機能を十分にまかない、従来以上に便利なドレッサーを目指す。今回は右利きの女性をイメージして設計し、中央に姿見、右側に収納を配置する。(図-11)

各収納については次のように定めた。上部は、髪の毛セットなどを行う為の収納を配置。ドライヤーなどの使用も考え、コンセントも設ける。中部は一般的な化粧用具収納、大きさごとに分類可能だ。下部は、くず入れとティッシュを収納した。各収納は、化粧品や小道具の実寸法を計測し、十分対応できる設計である。

また、全体の統一感を出すため、姿見の左側は飾り引き戸をつけた。姿見部分は左開きで開閉可能だ。

(5) 光源

ドレッサー前面の最上部に化粧時の光源を設置した。ランプは、顔が比較的きれいにみえる白昼色のものを使用している。光源の高さ等の調整は、実際の位置に照明を置いて検証した結果から定めたものである。

(6) デスク空間

内部は、デスク機能一般を充実させた。ツール、動式収納を設けた実用的な女性のプライベート空間だ。

姿見扉の裏側にはコルクボードが設置され、スケジュールなども掲示できる。(図-12)

さらに、パソコンデスク機能も併せ持ち、手紙や読書、ネイルなど個人的作業に十分な収納を備えている。実用的でありながらも、一人きりの特別な時間を過ごせる場となれば良い。また、扉が開閉した状態でデスクに座ると、左側面に壁ができ、小さな空間が形成される。(図-13)

姿見型ドレッサー (複合タイプ)

Design Check Point

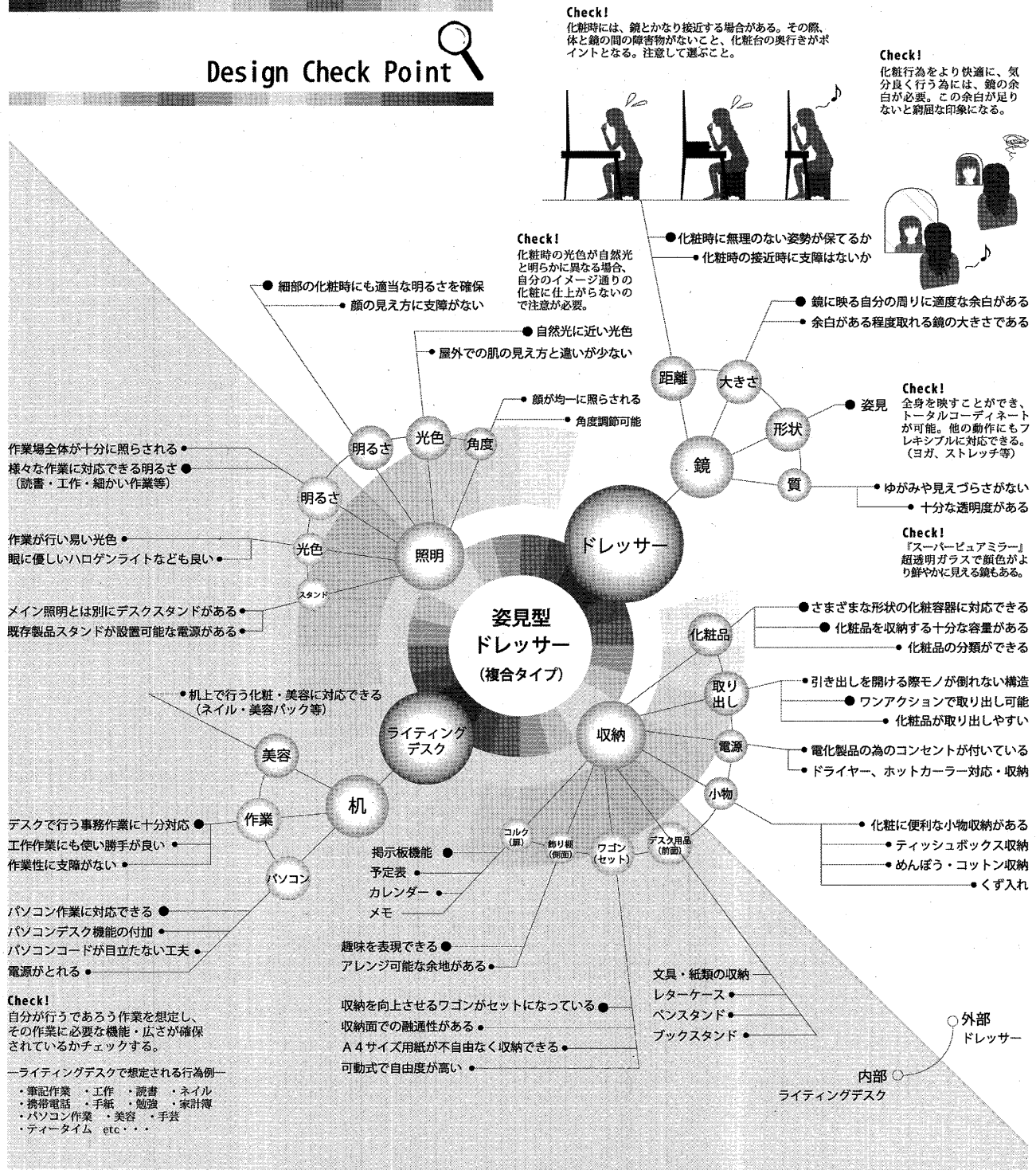


図-9 姿見型ドレッサー (複合タイプ) におけるデザインチェックポイント

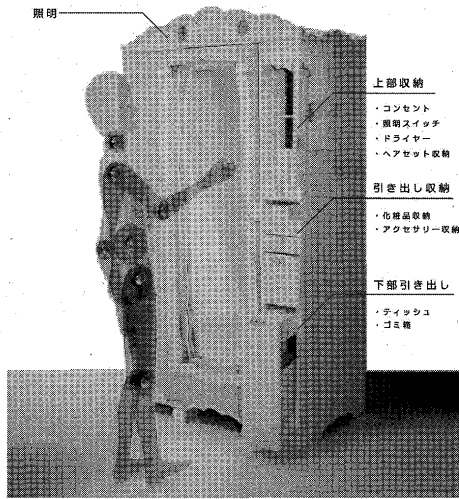


図-10 模型 (外観)

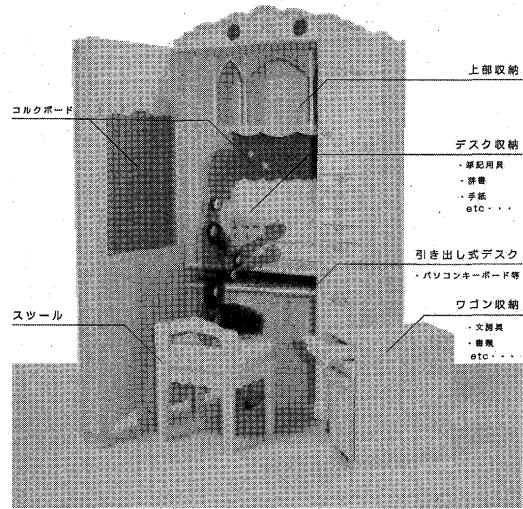


図-12 模型 (内観)

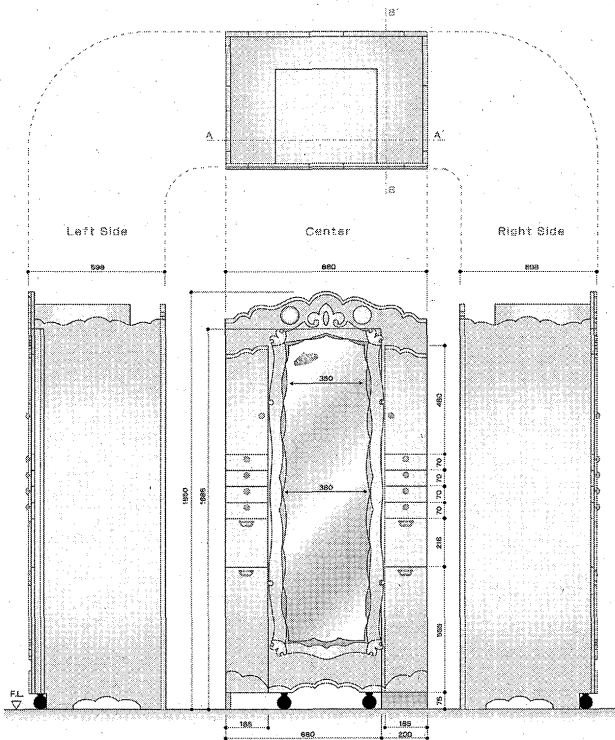


図-11 三面図

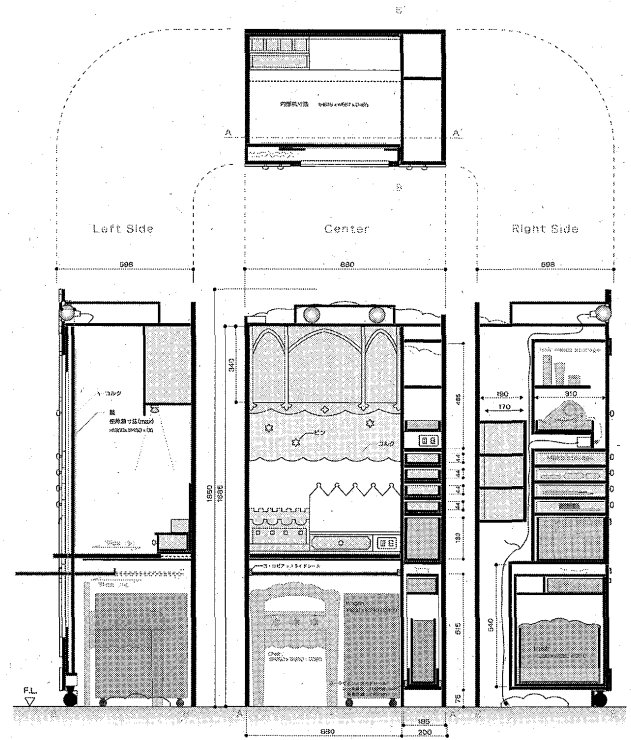


図-13 断面図


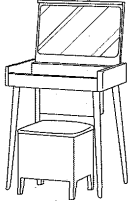
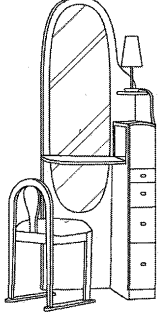
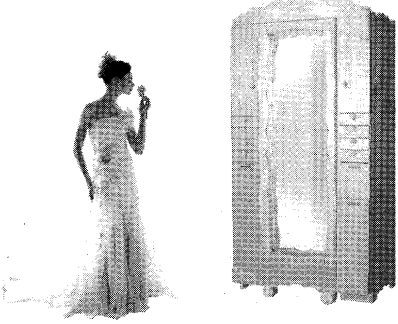
機能	項目	type 1 従来型ドレッサー	type 2 ライティングデスク型ドレッサー	type 3 姿見型ドレッサー (既存)	type 4 姿見型ドレッサー (複合タイプ)
					
鏡	大きさ	○	△	○	◎
	距離	○	×	○	◎
	形状	半身鏡	半身鏡	姿見	姿見
照明	明るさ	×	×	△	◎
	光色	電球色 (黄)	なし	電球色 (黄)	自然光色
	角度	斜め上	×	目線	上部2箇所
収納	化粧品	○	×	○	◎
	取り出し	○	△	○	◎
	電源	○	×	○	○
小物	電源	ドレッサーでは、化粧品以外に身だしなみや、髪の設定などを行うことが想定される。その際、ドレッサー自体から電源がとれるととても便利である。これにより、ドライヤーやホットカーラー等、セットの為の電化製品に対応できる。また、携帯の充電等他の用途にも応用可能なので、電源があることで利用の幅も広がる。			
	小物	ティッシュ収納	なし	ティッシュ収納	ティッシュ・くず入れ・ドライヤー収納等

図-14 タイプ別ドレッサー比較表

(7)他タイプドレッサーとの比較

今回のドレッサーの機能を、既存製品である他のタイプのドレッサーと比較すると(図-14)となる。(比較項目は図-9を元にして抽出した。)

3.1(2)でも指摘した既存ドレッサーの問題点が浮き彫りになっている。今回は、これらの問題を解決し、且つ機能向上させるようなデザインを意識して行った。(各機能のポイントは表を参照のこと。)

(8)セットとしての提案

今回はドレッサー単品だけでなく、それとセットで洋服ダンスとのバリエーションを想定している。

ドレッサー、洋服ダンス、整理ダンス、これら3点が揃えば、身だしなみの一連の動作をすべてコンパクトに行うことができる。

ダンスにもドレッサーと同じテイストでデコレーションを付加し、一連のイメージを持つ家具として提案する。これにより、更なるイメージ拡張、機能拡張された空間が誕生する。(図-15)

ここで注目したいのが、姿見扉を開くと、それが室内のパーティションとして機能するという点だ。この機能によって、次のような空間を形成することができる。

(図-16)

パーティションを境にして、部屋をA:公の場、B:個人的な場に二分可能となる。この要素は、ワンルームに暮らす女性にとって、かなり利便性があると考えられる。

まず、第一にひとつづきの空間内に、自分の特別な場が設けられる。また、来客時には、机上の作業中のものは閉じれば見えなくなり、常にきれいな部屋を保つことが可能である。

もし、この家具一式がワンルームに備え付けられていたらどうだろうか。家賃プラス少しの料金でこれらを使用できるのだ。可愛いものを好む女性たちにマーケットが見込めるだろう。このようなセットとしての提案も今後試みたい。

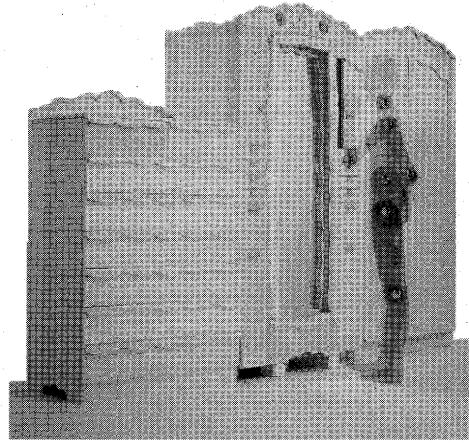


図-15 模型(セット)

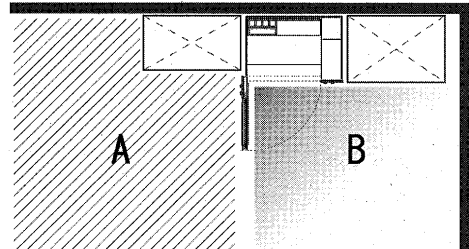


図-16 室内での使用イメージ

5 制作物

(1) 試作品

今回、実際の空間や使い勝手を検討するため、実寸で試作品を制作した。(図-17)

材料は、一般的なホームセンターで手に入る、シナ材合板12ミリ、15ミリ、21ミリである。木ネジを使用して組み立てている。

今後、実寸模型に関しては、実際に被験者に使用してもらい、意見を集める。そこから更なるデザインの更新を行い、製品化に役立てたい。

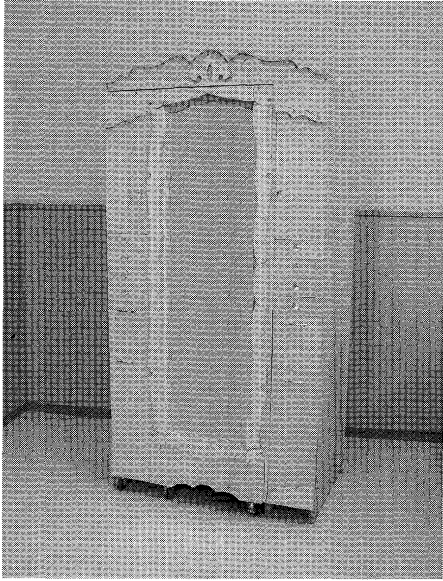


図-17 試作品（実寸）

(2) 自分で作れるドレッサー

ここで、もうひとつ触れておきたい点がある。このドレッサーは、ホームセンターレベルの技術で誰にでも制作可能なものとしてデザインしている点である。

試作品は、ホームセンターでレンタル可能な機材、購入可能な木材、部品等を使用して制作している。つまり、ホームセンターレベルで完成することは実証されている。

これまで挙げてきた機能を実現するドレッサーが、より安価な価格で、かつ簡単な作業で手に入るのだ。製品としての提案とは別に、「一般の人が自分でドレッサーを制作できる仕組みの提供」という要素も付け加えた。この企画実現の為、今後は制作カタログや仕様書、などの作成も予定している。

6 販売戦略

最後に、これらの販売は Web による販売を想定している。なぜなら、実際に家具屋聞き込み調査を行ったところ次のような結果が得られたからだ。

小型店舗のドレッサーの販売は、カタログ注文が主流となっている。大型家具店では、店頭にくっつかサ

ンプルを置き、販売している。だが、ドレッサーの販売低下傾向もあり、店頭サンプルを置く店は少数である。総じて、店舗用ドレッサーカタログから選択、注文するスタイルがほとんどという現状だ。

この販売体系ならば、Web 販売で詳しい説明をつけての販売で十分販売対応可能と考える。実際 Web 上で多くのドレッサーが販売されている。

この Web は、他のサイトとの差別化を考え、“鏡・ドレッサーの総合情報サイト”として位置づける。鏡・ドレッサーの選び方などといったコラムを設け、情報を発信していく。

その中で、既存のドレッサー販売とあわせ、推奨商品として今回のドレッサーを提案し、販売を行っていく所存である。

参考文献・図版資料

- 1) 小原二郎、内田裕哉、宇野英隆：
「建築・室内・人間工学」，鹿島出版会，1982
- 2) 小原二郎：「インテリアデザイン 2」
鹿島出版会，1973
- 3) フランツ・S・マイヤー：「装飾デザイン時事一
すぐに使えるヨーロッパ伝統文様」
- 4) 「世界のこども家具～INTERIOR FOR KIDS～」
エクスナレッジムック，2001
- 5) 「世界のこども家具～INTERIOR FOR KIDS～」
エクスナレッジムック，2001.
- 6) ペニー スパーク：「パステルカラーの罫～ジェン
ダーのデザイン史～」法政大学出版局，2004
- 7) 「AIST 人体寸法データベース 1991-92」
<http://www.dh.aist.go.jp/AIST91DB/91-92/main.html>